



衣川 実介

## 『梵鐘の音 除夜の鐘』

なにかと気ぜわしく感じる師走になりました。日頃は全く気にしていないお寺の釣鐘に目がゆきます。かいがいしく、ごまめや数の子、黒豆の煮物などおせち料理を作っている妻の様子を思い出します。

『ゴーン～、ゴーン～』と松林寺の除夜の鐘が聞こえるころには『年越しソバ』が出来上がり『フウフウ』熱いソバを頂いたものです。除夜の鐘は百八撞かれるそうです鐘の音は聞いていますが数を数えたこともなく、いつ始まっていつ終わったのかほとんど意識したことはありません。

平家物語の冒頭には「祇園精舎の鐘の音、諸行無常の響きあり、沙羅双樹の花の色、盛者必衰の理をあらわす・・・」と記されています。インターネット上の【現代語訳】によると

(<http://manapedia.jp/text/2321>) 以下のようにです。

祇園精舎の鐘の音は、「諸行無常」の響きがある。沙羅双樹の花の色は、盛んな者も必ず衰えるという道理を示している。おごり高ぶっている人（の栄華）も長く続くものではなく、まるで（覚めやすいと言われている）春の夜の夢のようである。勢いが盛んな者も結局は滅亡してしまう、まったく風の前の塵と同じである。

国語の授業はこれくらいにして、本題は鐘の音です。桶谷繁雄氏によると、大仏の铸造と、梵鐘のそれとが、どちらがむずかしいかといえば、私は、梵鐘が鳴器であるだけに、铸物師にとっては、きわめてむずかしいものであったろうと考える。その証拠は、はっきりとはしていないが、仏像などの铸物師と、梵鐘の铸物師とは、全然別のものであったようで、仏像の铸物なら、少しぐらいの失敗は铸かけなどによって修正できるが、梵鐘の音色は、一度できたらほとんど修正がきかないので、音色が悪ければ、もう一度最初からやり直すよりほかに方法はないのである。

鐘の音は、鐘の形、肉厚のバランス、青銅の成分（スズの配合率）、铸込みの温度など種々の条件により変化します。我が国では「長い余韻と程よいなり」が良いとされ「わび・さび」の文化を好む日本人によって独特の梵鐘（和鐘）に進化してきました。

鐘の音は古くから黄鐘調（おうしきちょう）が理想とされ、雅楽にもちいられる六調子の中の一つで 129 Hz（ヘルツ）、妙心寺の鐘がこの黄鐘調を出すといわれています。

参考資料 金属と人間の歴史 桶谷 繁雄 著 昭和40年 (株) 講談社

## 『鉄のふしぎ博物館』

来て！見て！ふれて！ ふしぎ体感

ホームページと電子メールをご利用ください。

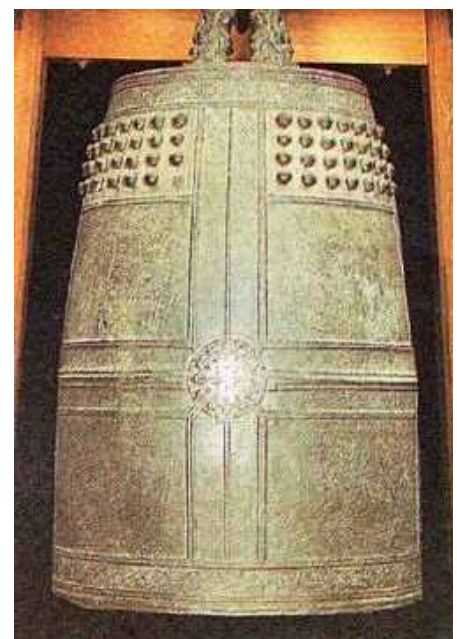
<http://www2.memenet.or.jp/kinugawa/>  
[ryou@memenet.or.jp](mailto:ryou@memenet.or.jp)



松林寺の鐘楼



沙羅の花



妙心寺の梵鐘

本年 | 年間ご愛読ありがとうございました！